

From: Minami Satsuma City

To: You

# *My way* マイ ウェイ

南さつま市からお届けする人生のレシピ

あなたに贈る『ひと』のモノガタリ。



Do you love your life ?







12 - 13

# *My way*

Recipe of life to give from Minami Satsuma City



14 - 15



16 - 17

あなたに贈る『ひと』のモノガタリ。

## 10 個の生き方

10 ways of life

P10 - 35



18 - 19

## MENU

06 新しいわたしに出会うまち。

10 これが私の生きる道

12 Takuro Sameshima

14 Shinohara couple

16 Shingo Yoshimine

18 Madoka Goto

20 Tomoko Komiya

22 Katsuhiko Chaen

24 Tomoyuki Shimono

26 Masataka Fukumoto

28 Hiroyuki Nagai

30 Takakazu Miyahara

32 番外編：Akira Kato

34 さあ、どう生きようか。

36 あなたへ、

38 Thank you



28 - 29



20 - 21



30 - 31



22 - 23



24 - 25



26 - 27



新しいわたしに  
出会うまち。

満員電車で揺られる日々。人々はみな早歩き。  
どこを見渡しても、見えるのは灰色の巨大な箱。  
なんだか窮屈なこの世界。なんだか退屈なこの世界。

スマートフォンばかりに目を向けてないでさ、ちょっとそこまで  
旅に出てみないかい？ たまにはそういうのも良いじゃない。  
若さ故の衝動に身をまかせてさ。

ここは自転車ひとつでどこへだって行けるまち。  
流れ込む爽やかな潮風。  
湧き上がる古の空気。  
今日も青い空が、どこまでもどこまでも続いている。

# 南さつま市



新しいわたしに会うまち。

# Movie



観光甲子園 2019 INBOUND 部門決勝大会進出作品

『新しいあなたと出会う旅』

Jouney of yourself search

MEMBER：西海晴、上竹龍之介、内原颯太、安水あみ

— よし、決めた。 —

そうして少年はサイクリングの旅に出た。



Spring

春



暖かな日差しが町全体を優しく包み込む。木々が芽吹き、小鳥たちが歌い出す。南さつま市の春はとても心地よい。市内のカフェやイベント等で、春の味覚を堪能するのも良いだろう。

おすすめスポット：りんりんロード桜並木

句：加世田砂丘らっきょう

イベント：3月 デュアスロン in 南さつま  
(加世田県立吹上浜海浜公園)

4月 唐カラ船祭り (坊津町泊)

夏

Summer

爽やかな潮風が町を吹き抜ける。古の空気が湧き起こり、町全体が熱気を帯びてくる。南さつま市の夏はとても賑やかだ。海のレジャーに、各地に伝わる伝統行事。この町に来るならやっぱり夏は外せない。初夏には巨大な砂像も出現する。

句：加世田のかぼちゃ (秋作付は 12 月)、砂丘メロン

イベント：5月 吹上浜砂の祭典 (金峰砂丘の杜きんぼう)

8月 ヨックパイ (金峰 高橋玉手神社)

9月 南さつまフェスタふるさと総踊り  
(加世田ゆめびか本町通り)



# 秋

# Autumn

暑さも和らぎ、この町にも実りの秋がやってくる。南さつま市の秋はワクワクする。うんまかもんを食べるもよし、よか景色を眺めながら体を動かすもよし。あなただけの秋を見つけに来ませんか？



おすすめスポット：竹田神社の紅葉  
旬：ブリ、秋太郎、極早生温州みかん  
イベント：9月 ツール・ド・南さつま（加世田南薩路）  
10月 坊ほぜどん（坊津町坊）



# 冬

冬の吹上浜も良いものだ。波音を感じながら、ゆっくり歩いて欲しい。南さつま市の冬は落ち着く。町にも穏やかな空気が流れており、のんびりと過ごせる。ちなみに、7ページの動画のクライマックスシーンは、冬の海で撮影したものだ。あの絶景をぜひその目で見てもらいたい。



旬：きんかん春姫、ぼんかん  
イベント：2月 お伊勢講（大浦大木場地区 笠沙片浦地区）  
鑑真の道歩き（笠沙 大浦 坊津）



A person wearing a white, long-sleeved shirt is shown from the chest down, holding a large bundle of dried, golden-brown grasses or reeds. The person's hands are visible, gripping the bundle. The background is a soft-focus view of the ocean with gentle waves under a bright, hazy sky, suggesting a coastal setting at sunrise or sunset. The overall mood is peaceful and contemplative.

# *My way*

Recipe of life to give you from Minami Satsuma City

あなたに贈る「ひと」のモノガタリ。

# これが私の生きる道



## 10個の生き方

10 ways of life

「将来の夢か・・・まだ決めてないや。」  
「したいことが見つからないんだよね・・・。」

—— 人生一度きり。 ——

誰しも一度は耳にするこの言葉。そうは言っても、後悔せずに生きるってのは難しい。失敗は日常茶飯事。悩むことだってたくさんある。

そんな時は少し立ち止まって、あたりを眺めて見てはどうだろうか。ヒントは意外と身近に転がっているものだ。そこで今回紹介するのが、南さつま市で活躍している10人の方々のモノガタリ。十八十色の人生をぜひ味わってもらいたい。

このモノガタリは、南さつま市で活躍する10名に取材した内容を人生のレシピとしてまとめたものだ。

冒頭は情景を描写。その場その場の雰囲気写真を写真と文字で感じてもらいたい。

中盤には、取材した10名の生の声。取材の時と変わらない、ありのままの言葉を可能な限り綴る。その後には続くのは、10名の方々が大切にしている言葉や思いをふまえて、私たち目線の文章で表現した。

そして、最後は、私たち若い世代へ向けたメッセージで締めくくっている。

「ああ、これからどうやって生きてこうかな。」

そんなあなたにこのモノガタリを贈りたい。

10 ways of life 01

鮫島 拓朗

カフェ店主

街のはずれ、小道の脇にぽつん

とたたずむハワイアンな建物。

庭のブランコでは子どもと

父親が楽しそうに笑っている。

そんな店内には洒落た音楽と

アットホームな空気が流れていた。



Takuro Sameshima

自然食品会社に勤務した後、カフェ「SUNSEA5」をオープン。

*My way* これが私の生きる道



以前は食品会社に勤めていたことや、奥さんがオーガニックに興味を持っていただけたり、素材にはかなりこだわっている。



こだわりのマシンで、こだわりの一杯を。



最近では常連さんも増え、  
”ここに来たら落ち着く”  
と嬉しい言葉を頂けることも増え  
たと笑顔で話す拓朗さん。  
今日も自身の好きなハワイのモ  
ノと音楽、そして家族に囲まれな  
がら、こだわりの一杯を淹れてい  
る。  
(西 海晴)

無駄だと思っていることも  
案外無駄にならない。  
嫌な経験もそのうちプラスに！

## 自分のしたいことが できる喜びが大きい

僕がこのお店を始めたきっかけは、「人生一度きりだからやりたいことをしよう」と決めたからです。みなさんがよく言われるこの言葉ではありませんが、もちろん周りの人々の支えが無いと中々実現させるのは難しいですね。でも、僕の場合は本当に環境に恵まれていたと感じています。何より店を開くことと決めた時に、嫁さんは「いいよ」と言ってくれ、献身的にサポートまでしてくれました。今この店があるのは、その嫁さんやその他大勢の方々のおかげです。

そして、お店をやっている以上やはり大変なことも少なくありませんが、今は自分のしたいことが出来る喜びの方が何倍も大きいです！

## 当たり前前だと思わない

これは拓朗さんの祖母がよく口にしていた言葉だ。これを昔から聞かされてきた拓朗さんは、当たり前のようにしてもらっていることには、より感謝の気持ちを持つように心がけているそう。ついつい私たちも忘れてしまいがちなこの気持ち。時には口に出して”ありがとう”と伝えたい…



◀インタビューの様子はこちらから！



10 ways of life 02

篠原 祐一・美香

Bansei Studio

「はい！こんにちは。」

バンセイスタジオです！

お客さんからの電話に  
元氣な声で応える奥さん。

旦那さんは、にこやかに笑っている。

ここは、美味しそうなパンが並ぶ  
写真館。これまでたくさんの方が、  
ここで思い出をカタチにしてきた。  
耳を澄ませば、今日も幸せそ  
うな笑い声が聞こえてくる。



Shinohara Yuichi/Mika

写真館であるバンセイスタジオを経営。旦那さんは写真を専門、美香さんはパン作りを専門として活動している。

*My way* これが私の生きる道

## 楽しく生きる (祐一さん)

僕はもう、楽しく生きるってだけです。自分のやりたいように生きるっていう。あ、自分勝手に生きるということではないよ。

自分が楽しくないと、一緒にいる人も楽しくないと思うんですよ。自分が楽しくいけば、周りも楽しくなる。そういう気流みたいなものを、自分から作っていききたいな。

これからどんどん、その気流でたくさん人を巻き込んでいきたいと思っています！

## 自分の意見を大事に

(美香さん)

私は、一对一でのコミュニケーションを大事にしてるかな。

接客は、いつも裏・表のないことを心がけていますね。どんな人とも平等に接して、自分の意見をしっかりと持つようにしています。

このお店は、どんな人でも本音で語り合えるアットホームな雰囲気にしたかった。これまでもそれまでやってきた。これからもそれは忘れずにやっていきたいです。



店内にはまるで篠原夫妻のように、仲良くパンとカメラが並んでいる。



夫婦二人三脚。

## 負けない

負けを認めない

(祐一さん)

自分の中で、負けと思ったら負け……(笑)思い通りにいかなくても、簡単に物事を諦めずチャレンジし続ける。

そんな祐一さんが今いるのは、彼が若い時に厳しく指導してくれた師匠のおかげだと言っています。

## お互い様の関係

(美香さん)

笑顔だったり幸せだったりを共有できる関係を築いていきたいと話す。

なかなか難しいことではあると話しつつも、「嫌なことも修行」と前向きに話す美香さん。

これからたくさんの人と出会う中で、美香さんのポジティブ思考はきっと素敵な出会いを運んでくれるだろう。

インタビューの最後まで、笑顔が絶えない篠原さんご夫妻。それぞれにしっかりと自分の意思がある。それでいて、ちゃんとお互いを認め合っている。そんな姿が素敵だった。

2人から溢れる明るく元気なパワーに惹かれてか、今日も思い出をカタチにしたいという電話が鳴り止まない。

(山川 由羽)

*To teen:*

普段の生活では気づけていないリアルを知ってほしい (祐一さん)

自分のことは自分で。自分の責任は自分で。自分でするから言い訳をせず、まっすぐ生きていける。(美香さん)



◀インタビューの様子はこちらから！



10 ways of life

03

吉峯 信吾

丁子屋



南さつま市・万世に大きな  
「丁」の文字を掲げる蔵がある。  
文化財にも指定されている  
その蔵の中には代々受け継が  
れてきた伝統の味があった。

Shingo Yoshimine

大学卒業後、金融機関に就職。3年前に丁子屋を継ぐ。

*My way* これが私の生きる道

## 新しい喜び

以前、私は金融機関に勤めていました。3年前に父に頼まれ、この丁子屋を継ぐことになりました。

前職で、経営のアドバイスなどをしていました。ある程度は経営について学んでいました。それは、今の糧になっているのかなと思います。

でも、いざ経営者になってみると、従業員の生活を担うことの責任の重さだったり、小さな会社なので製造から販売まで全部自分たちでしないとけなかったり、苦勞することはたくさんありました。

それでもここまで頑張ってきたのは、商品をお客様に買ってもらう喜んでもらえるから。そういう物づくりならではの前職にはない新しい喜びがあったからだと思いますね。

### 為せば成る

### 為さねばならぬ何事も

「とにかく行動することですね。色々考えてそとで躊躇してしまえば何も生まれないので」と語る信吾さん。

私たちは、何かと理由をつけて行動しないことが多い。まず何かアクションを起こすということを意識したい。

「丁子屋」をもっと有名にしたい。美味しい醤油を味わってもらいたい。

そのために常に味を磨く努力や地域への貢献は忘れずに続けていきたいと信吾さんは私たちに静かに、熱く話してくれた。

丁子屋の石蔵では、コンサートやカフェなども定期的に開催している。石蔵の活用も今後の楽しみですという。

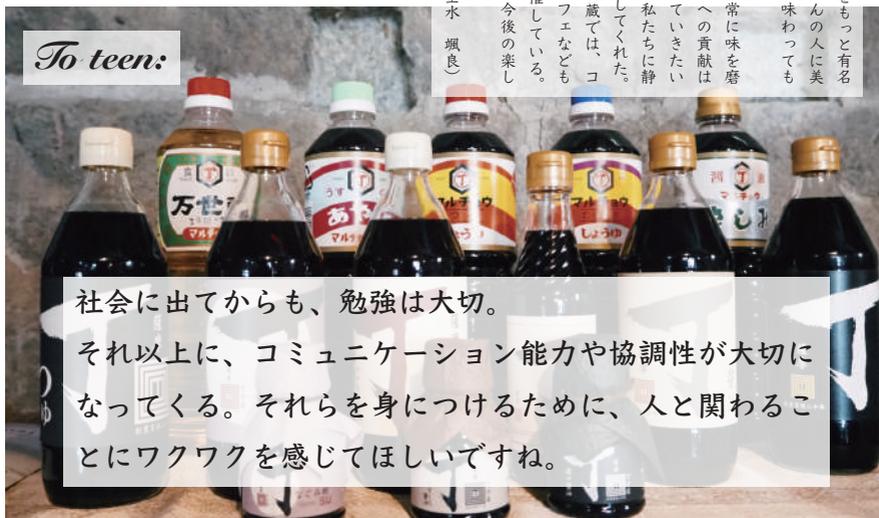
(東垂水 颯良)



万世の道沿いに堂々と建つ石蔵。趣深い石蔵は、住宅街の中でも一際目立つ。



石蔵は文化財にも指定されている。



To teen:

社会に出てからも、勉強は大切。それ以上に、コミュニケーション能力や協調性が大切になってくる。それらを身につけるために、人と関わることにワクワクを感じてほしいですね。



◀インタビューの様子はこちらから！

後藤 まどか

南さつま市観光協会



木の温もりを感じる  
観光協会の建物。  
建物の周りは、優しい  
空気で、包まれている。



観光協会に入ると、  
南さつま市の魅力がずら  
り。思わず手に取ってし  
まいたいものばかりだ。

Madoka Goto

旅行会社に勤めた後、青年海外協力隊での経験を経て、現在は南さつま市観光協会に所属。

## たくさんの人と、理解し合う

観光の仕事って、活動の領域がものすごく広い仕事で、多くの方々とたくさん関わるんです。それが観光の仕事の面白いところでもあるんです。ただ、関わる人が多いだけに、自分の意見がうまく通らなったり、まごめるのが難しかったりするものがたくさんあります。青年海外協力隊としてフィリピンにいたときは、言語の壁に悩まされたりして、人と入って理解するのが難しいと、感じました。けれど、難しいからこそ、よりたくさんの人や地域のことを知ることができました。観光の仕事も同じだと感じています。今では温かい南さつ市の方々とすっかり顔見知りです！さつきも、地元の人から刺身をいただいたばかりなんですよ(笑)。だからこそ、たくさんの方所で、いろんな人と繋がれる観光という仕事に、やりがいを感じています。



観光協会の入り口でバンヤリ。

これから、伝統技術を受け継いでいる人たちなど、先輩方の話をもっと聞いていきたいと話すまどかさん。

「昔から受け継がれてきた知恵や技術を知り、また、それを若い世代へ観光を通して繋げていきたい。」そう語るまどかさんの目は、希望に満ち、キラキラと輝いていた。(山川 由羽)

## おもしろきこともなき世を おもしろく

つまらない、そう思っているけど、なににも始まらない。彼女は、観光という仕事に携わりながら「この町は、何も無い」と思うのではなく、今の自分の考えから変えていくべきだ。と語ってくれた。私たちも、つい固定概念にとらわれがちだが、楽しそうに今の仕事についてお話しするまどかさんを見て、柔軟な考えを持ち、多くのことに向き合っていきたいと感じた。



自分で「体験する」ことが大事。

情報を簡単に手に入れられる世の中だけど、今のうちに多くのことを自分の目で見て、感じて、体験してほしいな。



◀インタビューの様子はこちらから！



10 ways of life 05

小宮 智子

mojo cafe



サンセットブリッジの下。  
窓からは万之瀬川が東シナ  
海に流れ込む、雄大な景色。  
オシャレな店内には、  
今日も国境を越えてたくさ  
んのお客さんが来ていた。

Tomoko Komiya

「なぜスーパーに地元の野菜が少ないのか」と疑問に思い、看護師から農業の道へ。農業の傍ら、mojo cafe を経営し、農業と地元の魅力を発信している。

*My way* これが私の生きる道



mojo cafeの前には東シナ海に流れ込む万之瀬川が広がる。



美味しいコーヒーでゆったり時間を楽しむ。

## 新しいつながり

子どもとのときからの看護師になりたいという夢は、ずっとぶれなかったんですよ。だけど、大人になって4児の母になってから、やっぱりこう…思うことがあって。看護師の代わりはたくさんいても、母親の代わりは自分以外ない。そう思って看護師をやめることにしました。それからは自分の視点が、農業を始めとじて、これまで見えてなかった未知の世界にしたいと思うようになりました。

今は、海外から旅行で来られるに方々との交流に興味があり、そういった方々が安心してきくような場をつくらうとホームステイの受け入れもしています。きっかけは、自分の子どもたちに、いろんな人たちの出会い、新しいつながりをつくることを経験させたいなと思ったこと。これまで、震災で被災した子どもたちや海外の子どもの受け入れもしてきました。

これまでの人生を振り返ると、若い頃の出会いやつながりが今に結びついてるなあと思います。だからこそ、新しいつながりが大切だと思うのです。

## ワクワクする心を 忘れない

「ホンモノ」にこだわって食材を提供したいと語る智子さん。これからのMojoco Cafeを盛り上げるためにもワクワク感はずっと欠かさない。

「ワクワク感の実行力の源！」と柔らかい笑顔で答えつつも、その言葉は熱く、力強い。取材している私たちの心にも大きく響いた。これから将来を考える私たちも、常にワクワク感を忘れずに、大切にしていきたい。



とれたて野菜が美味しい。

若い子に選択肢の一つとして農業を勧めたいと語ってくれた智子さん。昨今、農業女子というのも流行りだそう。

そんな智子さんは今日も素敵なお顔を、お店を訪れたお客さんの心とお腹を満たしている。まさに、みんなの「お母さん」だ。  
(園田 拓巳)



To teen:

どんどんチャレンジ！  
子どもの頃は失敗も当たり前！  
失敗も無駄ではない！



◀インタビューの様子はこちらから！

10 ways of life 06

## 茶圓 勝彦

砂像彫刻家 / プロデューサー



そこには様々な人に支えられて作られている。大迫力の砂像があった。

日本三大砂丘に数えられる吹上浜。生い茂った松林から差し込む日光が砂の白さを際立たせる。



Katsuhiko Chaen

1999年世界砂像選手権優勝後、本格的に砂像の道へ。多くのコンテストに作品を出展する傍ら、砂の祭典や鳥取砂丘・砂の美術館でプロデューサーを務める。

*My way* これが私の生きる道



インタビュー中も笑顔をとやさない勝彦さん。  
その溢れる熱い思いを私たちに丁寧に語ってくれた。

## 個性を活かすための視点

プロデューサーとして、砂の祭典などでもお仕事をさせていただいています。その主な仕事内容は、砂像を活用したイベントをどのように充実させるかという企画や砂像を制作していただく彫刻家さんへの依頼、多くの方にイベントへ足を運んでもらうための広報活動などです。

私がやりとりさせていただいている彫刻家さんの中には国からモニュメントの制作を依頼されたりする方もいます。そんな中で彫刻家さんたちですが、もちろんそれぞれ得意不得意があります。人物は得意だけど、建築物は苦手…みたいな。

## 明日死ぬかのように生きよ

### 永遠に生きるかのように学べ

どうしたら多くのお客様に楽しんでいただけるのかを考えて、イベントの企画に合わせる彫刻さんに依頼させていただいています。制作していただく彫刻家さんたちの本来の能力を最大限に引き出せるように個性を活かした場のデザインを大切にしていますね。

これはインド独立に大きく貢献したマハトマ・ガンディーの言葉。60歳手前にして、やっと自身の軸にびったりくる言葉が見つかったという。学ぶことを息たらない謙虚さ、一日一日を後悔のないように生きる強い信念。それが、これまで砂像彫刻家として生きてきた私の座右の銘だと勝彦さんは語る。

私も、つい面倒くさがって休みの日には、ただらだらしてしまうことが多い。しかし、そんな時にこの言葉を思い出して何気ない日々も全力で過ごせるようにしたいと心から思った。

まだまだ砂像には大きな可能性が秘められている。砂×水という一見相性の悪いコラボなど新しいことに挑戦していきたいと語る勝彦さん。今日も砂像を作りながら、お客様を満足させられるような企画を考えている。(東垂水 颯良)



価値観は変わる。常識を疑え。  
熱中できることを見つけて、常識に捉われずにいろんなことを経験してほしい。

To teen:



◀インタビューの様子はこちらから!

10 ways of life 07

## 下野 友幸

萬世酒造



吹上浜海浜公園に隣接するモダンな建物。正面の門の壁に掲げられた萬世酒造の銘柄は酒好きの人たちを唸らせそうだ。



Tomoyuki Shimono

鹿児島水産高校卒業後、始良でクルマエビの養殖に携わる。地元を盛り上げたいという思いから萬世酒造に就職。

*My way* これが私の生きる道



中に入るとたくさんの罎がお出迎え。



館内のスタンドグラスから光が差し込む。



まずはなににごともやってみること。  
 言われてやって、為になることも結構ありました。



◀インタビューの様子はこちらから!

## 私もお酒を作りたい

父が酒造メーカーで勤めていて、子どもの頃から焼酎をつくる仕事が身近にありました。そのせいもあってか、幼いときから焼酎をつくりたいと思っていたんですよね。だから、大人になって初めて自分でつくった焼酎を飲んだ時、こんなに美味しいのができたのかと感動しました。瓶詰めして商品の形になった時も感動して、近所の人に配っていましたよ(笑)

仕込みの時期は忙しいけれども、自分がつくったお酒がお客さんの手に渡って喜んでもらえるのが、何よりもやりがいですね。

## 天網恢恢疎にして てんもうかいかいそ

### 漏らさず

私たちの日々のおこないは、すべて天にお見通して、悪いことをした者には必ず天罰が下るとい言葉。

同じ原料を使っても、気候によつてできる焼酎の量や度数が変わってしまいうシビアなお仕事だからこそ、いいことも悪いことも全て天には見られているという意識を持って働くことが必要だ。

友幸さんは、いつもそんな思いで「杜氏」という職と向き合ってきたと語る。

杜氏は、決して目立つお仕事ではないが、この方々のおかげで、南さつまの伝統が守られていると実感した。

今は乾杯の選択  
 股がいつぱいある  
 時代。ビールにハ  
 イポールなどたく  
 さんある中から焼  
 酎を選んで欲しい。  
 そのためには自分  
 も様々なものを飲  
 んで食べて経験値  
 を高めなければ：  
 と友幸さんは語る。  
 そんな思いで今日  
 も、前掛けを絞っ  
 て蔵に向かう。  
 (園田 拓巳)

# 福元 雅岳

福元農園



ここは、南さつま市津貫地区。  
福元農園は、四方を林に囲まれ、  
吹き抜ける風が心地良い。

広大な大地には、カブの葉が  
青々と生い茂っており、今日も  
夫婦二人で切り盛りしている。



Masataka Hukumoto

加世田常潤高校有機生産科を卒業後、滋賀県の専門学校へ進学し農業について専門性を深めた。鹿児島有機生産組合に3年勤めたあと独立。

## 失敗を次に生かす

### メンタルを

幼少期、祖父の家庭菜園で採れたてのキュウリを食べ感動したことが農家になるきっかけだった。

当時、「農家をやりたい!」という雅岳さんの意見に家族は猛反対。キュウリを食べさせてくれた祖父にまで反対されたという。

反対を押し切り、暗れて農家になったが、なぜ家族が反対したのかの意味をようやく実感したそう。

「もう、失敗だらけですね。」苦笑いしながら雅岳さんは失敗談を語ってくれた。「最大の失敗といえば、種をまくタイミングを逃し、その時のカブを全部出荷せずに畑に返してしまったことです。」農業は、畑の準備と種をまくタイミングが大事で、ベテランの農家さんも常に学ぶ姿勢を忘れないそうだ。自称「失敗だらけの農家生活」で心がけているのは、失敗を次に生かす姿勢そのもの。

「失敗した」で終わるのではなく、「何で失敗したのかな?」「こうしたら失敗しないんじゃないかな?」と失敗から日々学ぶ姿勢を忘れないようにしているという。



取材終了後には、お土産のカブまでいただいた。



カゴいっぱい赤カブ。「もものすけ」は福元農園一押しの野菜だ。

## あなたに感動を

現在、福元農園では、「カブ」をメインで育てている。

その理由は、なんと言っても「味」。「スワン(フルーツカブ)」と「もものすけ」という2種類の品種はそれぞれ個性があり、それに合わせた食べ方もある。畑で取れたてのカブは、生のままでも十分甘くおいしい。

「はじめてカブを食べた時にこんなにうれしいんだ!」と感動した。

「カブを食べたときのうれしい感動をたくさんの人に届けたい!」

と笑顔で話す雅岳さんは、お客さんが「え、なにこれ! おいしい!」と驚いているところを見ることが一番の楽しみだそう。農業を始めて4年目の福元さん。笑顔の素敵な奥様と有機栽培にも挑戦。「美味しく生きて食べてほしい、皮ごと食べてほしい」そんな思いから、農業との向き合い方も試行錯誤中だ。

福元農園では、カブの他に、里芋、加世田カボチャ、ハーブなどを栽培している。地元スーパーや、A-Zかわなべ、地球畑など様々な店舗で販売しており、オーガニックマルシェなどにも積極的に参加。直接、福元農園へ行けば、その場で穫れたて作物を購入することもできる。

(中村 大悟)



*To teen:*

未来が見えないからこそ、どうしたらいいのかわからない。  
そんなときは一歩先の未来を考えることから  
始めるといいかもしれませんね。



◀インタビューの様子はこちらから!

10 ways of life 09

## 長井 洋将

ヤマチョウ



並べられた新鮮な魚には真剣な  
まなざしが向けられ、競りの開  
始とともに甲高い「カチッ」と  
いう音がテンポよく鳴り響く。

空が白み始め、まだ辺りに静けさが漂  
う中、威勢のよいかけ声が聞こえてく  
る。ここは南さつま市笠沙町の片浦漁港。



Hiroyuki Nagai

魚の卸しと加工を営むヤマチョウの長井さん。もとは航空自衛隊で事務をしていたが、兄の誘いで家業である漁業の道へ入った。自称「魚嫌い」であるが、笠沙の魚だけは特別だという。

*My way* これが私の生きる道



真剣な眼差しで魚の競りに臨む。



どんどんと活きの良い魚があがってくる。

## 助ける心が自分を助ける

以前は、福祉に興味を持っていた洋将さん。身近な人を幸福にすることも「福祉」の一つだと捉え、人の役に立てること、魚がおいしく感じてもらうこと、にやりがいを感じているそうだ。「この職場はどの仕事もそれぞれ大変です。ただお願いするのでなく、みんなて協力して助け合うのが大事なんです。」と人の役に立つことの重要性を語る。それは、お客さんへの対応にも垣間見え、その日の在庫や値段などの状況から、来店していただいた方に他の店舗を紹介することもあるという。「お客さんのおいしいと言ってくれたら、笑顔が見たい、役に立ちたい」というまっすぐな思いが印象的だ。

## 「こゝ一番の正直者」

これまでの人生で、嘘が原因で何か失敗したことはありませんか？ という質問に「そりや、たくさんありますよ。」と長井さんは笑顔で答える。十数年前に今の店舗を構えたとき、漁業仲間に認めてもらうまで苦労の連続だったという。魚の名前もうる覚えだった長井さんの仕事は、魚を覚えるところから始まった。魚の値段や見極め方、食べ方なども全一から学んだそう。初めの頃はなかなか売りが

見つからず悪戦苦闘した。何度も心が折れそうになる中、洋将さんを助けてくれたのは県外にいる笠沙の先輩たちだった。笠沙の良さを理解している地元愛あふれる先輩たちにまずは魚を買っていただいた。この小さなコミュニティから評判はどんどん広がりが、今やヤマチヨウは関西各地、遠くは東京まで販路を拡大できるようになった。

朝の市場でも電話やLINEでやり取りをする様子が伺えた。ここまで成長出来たのは洋将さんが大切にしている「正直」がキーワードだ。商品に関する情報と状態の細部に至るまで、丁寧かつ的確に説明する。万一、お客様に納得して頂けなかった場合もその声に寄り添い、厚い信用・信頼へとつながっていく。

人生のすべてを正直に生きることは難しい。しかし、「こゝ一番のときに「正直」の重要性に気づくには遅くない。

「漁業と生活が切り離されつつある現代で、新鮮なものを食べるという人間本来の喜びを感じてもらいたい。」とまなざし鋭く語る洋将さん。

南さつ市で捕れるおいしい魚を県内のもっと多くの人に知ってもらうために、今日も漁港へ足を運んでいる。

(中村 大悟)

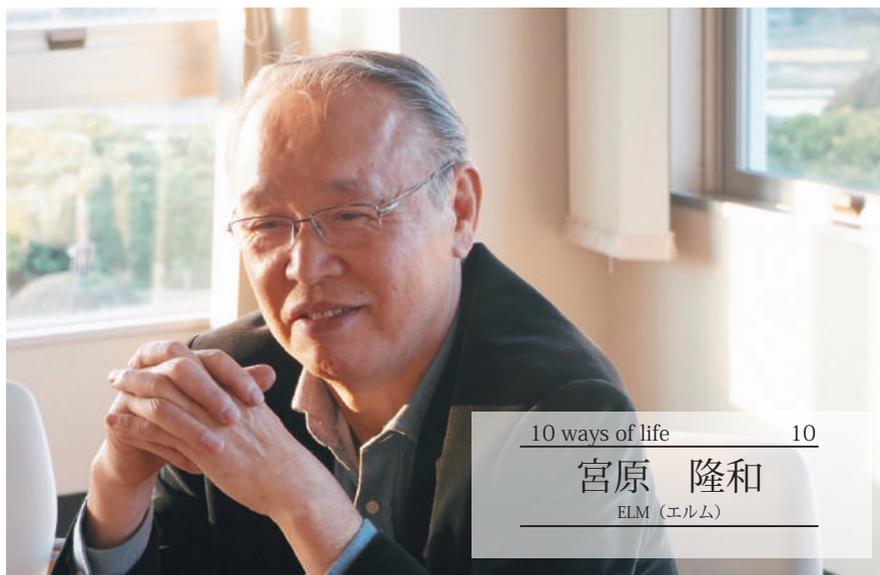
やりたいことが見つからない経験は、誰もが歩む道。でも、今この一瞬の積み重ねが人生につながっています。

「この瞬間を一生懸命に生きるには、どうすればいいか？」を考えてほしい。

To teen:



◀インタビューの様子はこちらから！



10 ways of life \_\_\_\_\_ 10

宮原 隆和

ELM (エルム)



高台にあるエルムからは、  
のどかな南さつまの田園風  
景が見える。ここでは日々  
電子機器と向き合い、開発  
や生産に励む人々の姿が  
あった。小さな町で、大き  
な世界と戦ってきた男の話。

Takakazu Miyahara

大学卒業後、大阪の企業に電気関係の技術者として就職。その後、退職し、自らの理想を具現化する会社「ELM (エルム)」を設立した。

*My way* これが私の生きる道



実験室で私たちに質問しながら、説明してくれる隆和さん。



今日も仲間と開発に明け暮れる。

## 南さつま市から

### 世界を見つめる

なぜこの会社を設立したかという点、地元に戻ってきたという思いももちろんありましたが、何より自分の技術を生かせる会社が鹿児島になかったからなんです。そして今では、都会で学んだことを地元で生かしたくても生かせなくて困っている人たちを受け入れられる企業にしたいと考えています。

今では、世界に向けてビジネスを展開していますが、その中でもやりがいは、皆さんのような若い人たちに、「この南さつま市からでも世界規模でビジネスがとれるんだ」と感じてもらえることです。もちろん、ハンディキャップはたくさんあります。都市と距離が離れているから製品を売るのも難しいし、作るのも難しい。そして、何より人が集めにくい。でも、鹿児島でここにしかない企業だから、面白い人たちが入ってきてくれますね。

今、園芸農業世界一のオランダの農家と共同で、農作物を市場に出す実験を始めています。世界ナンバー1に認めさせることができれば、それは一流の証なんです。これまで、そして今から「海外」という視点ではなく、世界一つのマーケットだ、と捉えて面白いことをしていきたいと考えています。

## ないことがチャンス

これは隆和さんの会社の合言葉でもある。「ない」ことをマイナスに考えるよりも、「それを実現させたらすごい！」とプラスに視点を変えるべきだという言葉だ。

実は、エルムの建物はインフラに依存しない（環境の負荷にならない）ことを目指している。普通に考えれば、不便に感じると思われるが、消費エネルギーを最大限に削減し、自然エネルギーを活動することで可能になるという。「未来への実験」と称するその姿勢がまさに「ないことがチャンス」と言えるだろう。

私たちは「できない」「不便だ」といった面ばかりに目を向けがちだが、視点を変えてプラスを見つけていけば、チャンスはいくらでも転がっているのだと取材を通して、考えることができた。

「世界」に動じず積極的に行動している隆和さんは、これからもやりたいことがたくさんあるという。「早く引退したい」と笑いながら話す姿に、なぜか頼もしさを感じたのは私だけではないだろう。

今日もエルムは南さつま市の小高い山から世界を見つめている。

（山口 紅葉）

To teen:

多くの方ができない理由を探したが。でも、実は、できる理由を探すほうがずっと生産的で楽しいんだよね。  
皆さんが、自分で限界の線を引かないことを祈っています。



◀インタビューの様子はこちらから！



自転車野郎アキラの

一度きりの人生 悔いのないように生(行)きたい

生き方

行き方

10 ways of life Extra edition

加藤 彰

だんだんと自転車の魅力にとりつかれていった：

— 幼少期、化石採取が好きだったアキラさん。

休日は32kmの道のりを自転車で走っていた。ハンマー片手に「カンカン」と大きな音を立て、夢中で化石を探し回っていた。

ときには民家の敷地まで入ってしまい、家主にこっぴどく叱られたという。

『今じゃもう誰の敷地だとか、国のものだとか、規制が厳しくなって出来ないよね。昔はそんなものなかったから。ハンマーで堂々とカンカンやっとならね、たまに「こらあ！」って怒られたりしてね。笑』  
懐かしそうに笑顔で語るアキラさん。

もともと体を動かすことが好きだったこともあり、自然の風景を見ながら風を感じる自転車の魅力を感じるようになっていった：

これが

『自転車野郎アキラ』

の原点



▲ 愛車「風子」と  
思いの詰まったTシャツ

## アキラの一押しエピソード

スーダンでお茶をいただく…

アキラさんが一番熱く語ったのは、スーダンで出会ったおじいさんとの話だった。

見ず知らずのアキラさんとおじいさんは、2杯のお茶をごちそうしてくれたという。

スーダンは一般的に貧困国と言われてい  
る。さらに、その土地には井戸もなく、お茶  
葉も現地では高級品だったに違いない。お  
じいさんはどのような心境でアキラさんにお  
茶をごちそうしたのだろうか？

イスラム教の六信五教の一つ「喜捨」の考  
えを知ったのは、このエピソードのあと。困  
っている人に対して施すことを当たり前にする  
スーダンの方々姿勢に感動したという。

「海外というと一般的に危険というイメ  
ージがついてしまっているが、実はそうでは  
ないです」と語るアキラさん。多方面から物  
事を見ようとする大切さを学んだという。



## アキラのサイクリングの



既読 13:01 サイクリングの魅力をズバリ教えてください！

やっぱり、自由に思うところに行けることかな？  
あとは、何とも言えない心地よい疲労感だね！！ 13:01

既読 13:05 南さつま市でオススメのサイクリングスポットを教えてください。

何と言っても「亀ヶ丘」だよな。これは絶景だよ！！  
ぜひ、海道八景もサイクリングしてみてね。 13:05

既読 13:12 サイクリングが一番きついつきってどんなときですか???

高い山に登るときが一番きついついよね。高低差が大き  
いと、もう足がバンバン！でも、これ乗り越えた  
先にある絶景は圧巻だよ！これは、キツさを味わっ  
た者にしか分からないよね… 13:12

既読 13:20 す、素早いご回答ありがとうございます汗

## Akira Kato

“自転車世界一周”に挑戦するため、サラリーマンを辞めたのは33歳。  
のべ3624日、111ヶ国、140261km  
を愛車「風子」と走破。

自然一体型の“野生的自転車野郎スタイル”旅を確立し、行く先々の人々と親交を深める。未来へつなぐ試みとして、自転車旅人へのメッセージを入れた、自転車野郎タイムカプセル”をユーラシア大陸26ヶ所に埋設した。

平成25年6月14日、長かった自転車旅に区切りをつけ、平成28年9月1日から、地域おこし協力隊員として南さつま市で活動。平成31年に退任。

黒松栄光のチャレンジカー賞  
一等賞  
加藤 輝



「好きなことならあるけど・・・。」

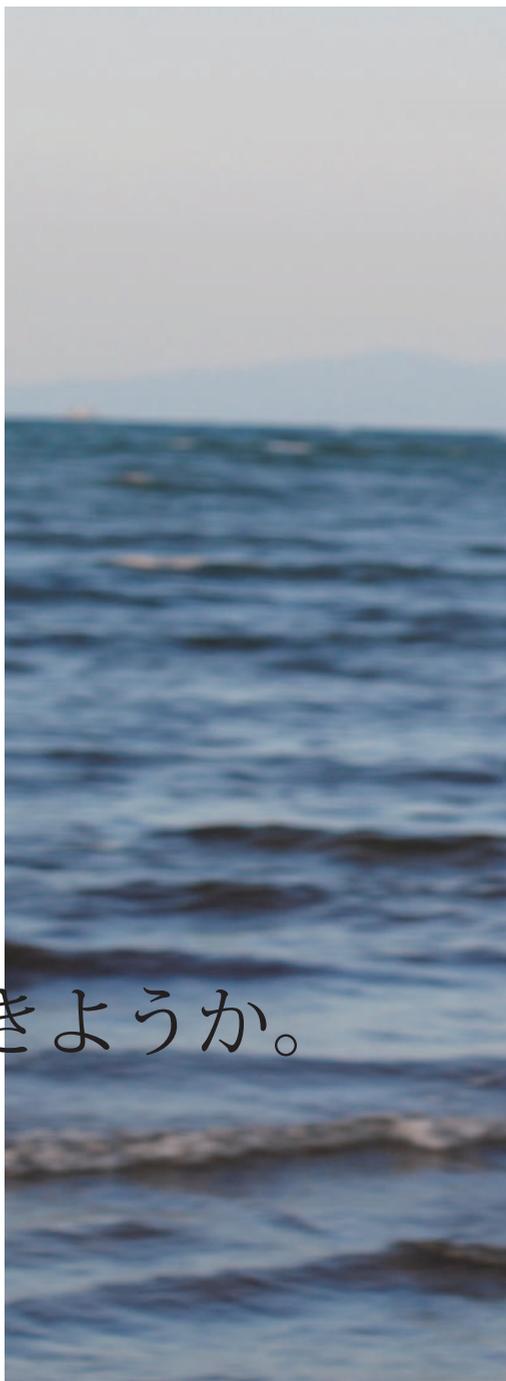
好きを貫いて生きるのは難しいことかもしれない。それでも「好き」を貫く大人って何だか、かっこいい。どこかキラキラとしている。

今回は南さつま市で活躍する10名の方々のモノガタリを紹介してきたが、あなたのすぐ近くにも素敵なモノガタリを持った大人がいるだろう。

人生一度きり。

だからこそ、身の回りの人からたくさんの人生経験を聞いて、広い価値観を持つ。そして、あなたはきっとそのストーリーから自分の未来を思い描き、ワクワクすることだろう。

さあ、どう生きようか。



To you

あなたへ、

45.6

ここまで My way を読んでいただきありがとうございます。  
最後にもう少しだけお付き合いをお願いします。

私たちは約3年前から南さつま市の観光PRを行ってきました。これまで、サイクリング推進パンフレット「僕と、君と、サイクリングと、」の作成や、観光甲子園への出場、また地域イベントのステージ運営やボランティアと、幅広く活動してきました。

この町は本当に素敵な町です。

自然がいっぱいで、食べ物も美味しくて、なにより人が温かい。  
ですが、そんなこの町にも課題はたくさん…。観光資源の不足、交通の不便、少子高齢化や過疎化など、観光PRを行うにあたり、本当に悩みまくりました(汗)

「それでも何とかしてこの町の魅力を伝えたい！」

そこで私たちが注目したのが・・・

地元で輝く「ひと」でした。

ひと = 観光資源

海や山で遊んで美味しいものを食べるだけでも良いけど、

南さつま市をもっと深く味わって欲しい。

南さつま市をもっと好きになって欲しい。

だからこそ、キラキラ生き生きとした地元の人とあなたをもっとつなげたい。

そんな思いからこの My way は出来ました。

しかし、それだけではありません。

この冊子を作ったのにはもう一つ大切な理由があります。ヒントは上の数字。

# 将来の夢が「今のところない」「わからない」「わからない」

そう、45.6 という数字の答えは下のグラフにあります。新成人の約半数が、将来の夢が「今のところない」「わからない」と答えているのです。さらに Basic5 教育開発センター高校データブック NO.26 によると、高2を対象に、理想の大人の存在について、あなたには、「あの人のような生き方をしたい」と思える人はいますか。と調査したところ「いる」と答えたのはたったの17%でした。

—— いろいろな生き方を知ってもらい、

夢を思い描くきっかけにしたい。 ——

そんな思いで「人生の参考書」をテーマにこの冊子を作りました。これが *My life* が出来たもう一つの理由です。せっかくの人生、生きるなら楽しく生きたい。でも何をしたいのかも、何をすれば良いのかも分からない。そんなあなたにこれが届いていたら嬉しいですね。固定概念に捉われず、この冊子で色々な生き方を知っていただければと思います。そして、少しでも進路選択や人生設計の手助けになれば光栄です。

とは言いつつも、制作者である私たちも高校生です(笑)。事実、制作時点でメンバーの中にもまだ夢が決まっていない人は何人もいましたし、進学先を決めていない人だけではありません。

それでも今回の取材を通して、普段なかなか聞くことのない「ひと」の人生経験を聞き、多くの学びや驚き、そして感動を得ることができました。

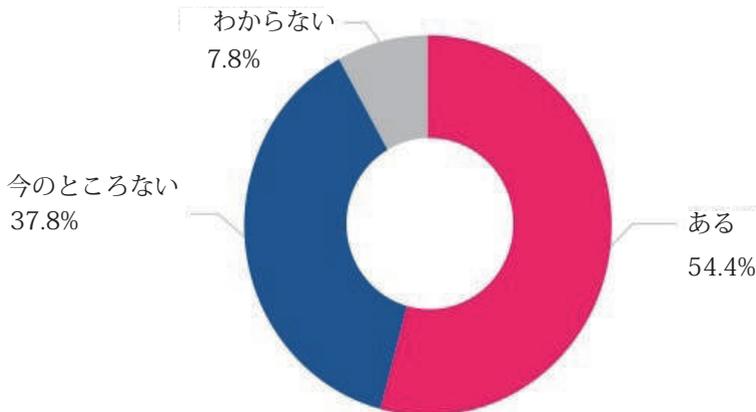
この経験を糧に、私たちも自分の人生を思う存分楽しんでいきます！



To you

## ●将来の夢はあるか

ベース：2018年の新成人 (n=500)



「2018年新成人に関する調査」

画像出典 マクロミル

*Thank you*



本誌を作成するにあたり協力して下さった方すべてに、感謝申し上げます。

## 鳳凰高等学校普通科「ヒューマンツーリズム Project」

Magazine editor：西 海晴 中村 太悟

Photographer：西 海晴

Video editor：上竹 龍之介 内原 颯太

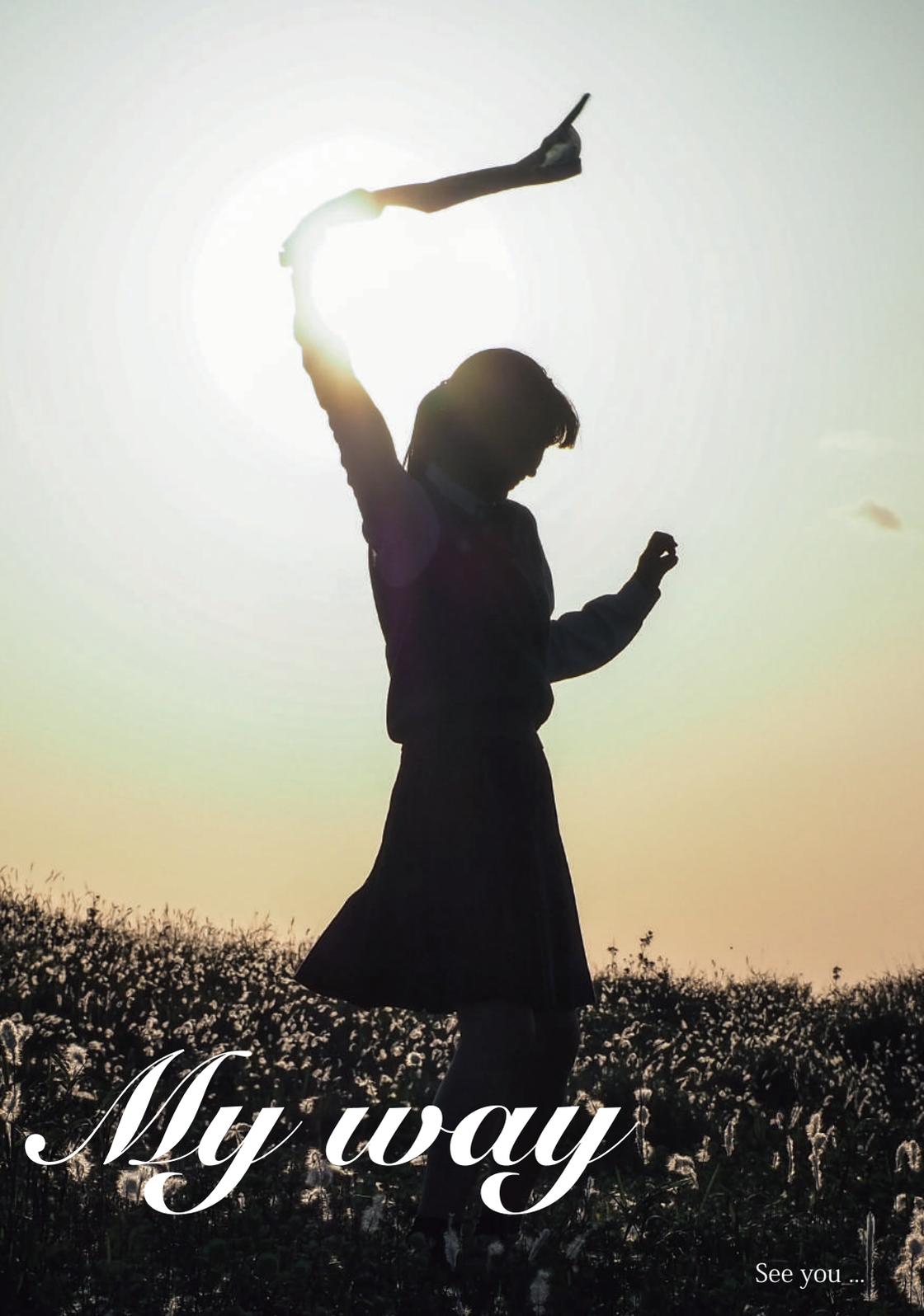
Writer：園田 拓巳 山川 由羽 山口 紅葉 東垂水 颯良 西海晴 中村 太悟

Illustrator：田中 里香子

Interviewer：高吉 萌加 有村 美治 新留 千尋 床並 美咲希 竹波 希春 内原 颯太  
西海晴 中村 太悟



本誌は 2019 年度南さつま飛びたて高校生事業の補助金を活用して制作いたしました。



*My way*

See you ...



Love the life you live. Live the life you love.

–Bob Marley –



南さつま飛びたて高校生事業 with 鳳凰高等学校普通科